

618

特255

693

聖化同盟編輯部

日本人と眞の神

國民聖化同盟發行



始



特255
693



日本人
と眞の神



豫め申上げますが、私共は、眞の神に就いての比類なき聖典、舊新約聖書の信仰者で御座います。そして多年の間聖書を読めば讀む程、聖書の眞髓と日本の古道、即ち神ながらの道の眞髓と全く同一であることの確信を強められた結果、一つには、近頃流行の淫祠邪教に迷はるゝ人々に目覺めて眞の神様を信仰して頂きたく、一つには、矛盾だらけの西洋神學の信仰にこびりついてゐる、所謂基督教會の信者達にも目覺めて聖書そのものゝ信仰に立ち日本精神の眞髓をわかつて頂きたく切に祈願して居るもので御座います。

日本人と眞の神様信仰

今日は、「日本人と眞の神様信仰」

に就いてお話しいたします。これは、何を扱って措ても考へねばならぬことでありまして、此の頃ヤカマシク云はれる日本精神の眞髓を究める一番の近道、大和魂を、身と、心と、生涯に磨き出す、根本となる一大事であります。

一體、人間が「われは人間なり」と悟る時、始めて人間らしい生活が始まります。日本人は、「われは日本人なり」と自覺する時、始めて日本人としての生活を始めることが出来るのであります。

日本精神とは何であるか

といふことが、此の數年來程熱心に論ぜられたことは歴史上曾つてありませんでした。然し乍ら、之を煎じ詰めますれば、神ながらの道で御座います。

それでは此の「神ながらの道」とは何でありませうか。古來これを文字で表はします時は「惟神道」また「隨神道」と書きまして、其の意味を一口で申せば、「唯一の眞の神様を信じ崇め奉り」「身と、心と、生涯をもつて隨ひ奉り」「神ながら、即ち神の如くに似通ふた品性に造られて行く」道で御座います。

元來 上なる者を神より來るもの上なるものとして崇め尊び従ふ所に日本人の美點があります。

先づ、天地の神を畏み、神を畏むが故に皇祖皇宗を齋き祀り、天津日嗣の天皇を尊び祖先を崇拜する、此の縦の道義の念が、親子、君臣、主従、師弟の間に實に美はしく織りなされてゐるのであります。忠孝一本と申しますが、實に、信、忠、孝、義を貫く一本の大道が神ながらの道であります。また、上に立つものも、同じ神ながら、

即ち、神の公義と仁慈の御旨に隨ひつゝ、下々に臨むのでありまして、此の上下相通する美しい精神こそ、わが國體の奥義であり、大和魂の精華であります。私共の天祖、天照皇大神が天孫に賜り、皇統連綿相傳へさせられましたる三種の神器は天の神を祭る爲であると同時に實に國を治むるの要諦を皇宗に授け、心と身を修むるの要諦を國民に垂れ示し給ふたもので、神ながらの眞髓が遺憾なく表徴されてゐるので御座います。これに就きましては後で詳しく學ぶとして先づ此の

「神ながらの道」の根本である天の「眞の神様」

に就いてお話しをせう。

「天に二日なく、國に天皇は御一人なる如く、天の眞の神は唯ち一方で在し給ひます。此の正しい信仰は、數千年前西部アジアにありました我等日本人の大先祖がすでに有つて居りました。世界の萬民の爲の經典、眞理の寶庫と稱せらるゝ、舊新約全書にも「我らの神エホバは唯一のエホバなり」「父なる唯一の神あるのみ、萬物これより出づ」

と云ふ風に記されてあります。感謝すべきことには、我等の先祖は或る人々が云ふ様に、今尙ほ未開の儘なる南洋の土族ではなく、大昔、すでに眞の神様を信仰し、高い文明文化を誇つて居た優秀な民族であつたのであります。此の眞の唯一の神の信仰が長い年月の間に於いて、種々の宗教思想が混り、濁りまして、明らかさを失ひましたが、日本の日本たるゆゑを辨へ、之を發揮し直すには、何としても此の眞の神の信仰を明らかにせねばなりません。就いては、一般の

日本人の頭にある神の概念を整理する

必要が御座います。

元來、漢字の「神」の字の有つ意味合は、日本古來より用ひられた「カミ」といふ言葉の意味と異なるのであります。昔の支那人は、示遍(二は天を表はし、小は日月星辰の三つを意味するもの)に申、即ち人間の知識で測り難い不思議なものを書き添へて、神様とは天にある得體の知れないもの位に考へてゐたのです。ところが、大昔日

本人が考へてゐた「カミ」といふことは大變異つた内容を有つてゐました。これは古事記、日本書紀、古語拾遺など申します古典を調べますとよく判ります。此の言葉の源に就いては、古來十數種の説があり、何れも一理ありますが、最も穩當なのは「上」の意であるといふ説であります。日本人は、昔から、

總じて上なるものを「カミ」と云つた

のです。實例を挙げませう。地理的、空間的なものでは、高い所を、上といひ、上座山上、水上、川上、風上、頭、又その上の髪、上で鳴るから上鳴り(雷)など云ふのがあります。時間的には、溯るとき、上つ世などと申します。

又、社會的地位、身分などの貴い意味では、古代の地方豪族のことをヒトコノカミと稱び、政府は「お上」、家政の切り盛りする妻は「おかみさん」、一國一城の主は「伊豫守」「播磨守」など、云ひ、我等日本民族の上にあつて統治し給ふ天皇を「上御一人」と崇め奉るのであります。

更らに、人間の力の上に出るもの、恐ろしいものなどをも「カミ」と申しました。此の意味では、狼も「カミ」なら、蛇も夜刀神で「カミ」であり、兇悪な山賊、海賊なども皆「カミ」と稱されたのであります。

それから人の知識より上なるものも「カミ」でありました。それで大自然に脅かされ勝であつた故もありませうが昔の人は、水神、風の神、山の神、海の神、火の神、雷神などを認めたのであります。

また、古事記には、伊邪那岐尊が桃をオボカムツミノミコト（カミ）と稱ばれ、御頸玉をもミクラタナカミと申されたことが見えるから、何でもかんでも、平常と變つた、貴いもの、不思議なもの、恐ろしいもの、美しいものはおしなべて「カミ」であつたのであります。ですから八百萬の神々があつたのは此の爲です。

しかし乍ら、神ながらの道に於きましては、善神、悪神の區別が、判然とついで居り悪神の退治や征伐が、私共の大先祖達の歴史を貫いて居りまする大道であります。

之れに伴ひ、迷信を打ち破らうといふ正しい思想の活動もよく見られるのであります。之等をつつめ、煎じ詰めて研究して参ります時には、我等の大先祖達は、カミのカミなる、唯一の眞の神、天御中主神を信仰し奉つて居つたことがわかるのであります。此の點を明らかにして見ませう。

日本古典の最初に見える神々

は、古事記では五別大神、神代七代と云はれ、日本書紀では、天神七代、地神五代と云はれます。これらの神々を比較研究して見ますると、古事記の五別天神の外は悉く人間であり、人間の「上」なるものであります。それで、古事記の神は、五別天神をのぞいて皆、書紀に於て「尊」と稱ばれて居ります。〔「みこと」は「御事」で何々様とか殿とかいふ意味であります。〕

故に、人間でない神を求むれば、五別天神だけといふことになるのであります。この五柱の神々即ち、

天御中主神

高御産靈神

神御産靈神

宇麻志阿斯訶備比古遲神

天之常立神

に就いて學んで見せらう。

天御中主神

に就いての、今日の一般の神道學者の説の公平な總括りを申せば、「天地宇宙」の成り立つ第一の原因、全生命の大根源であられ、天、即ち宇宙の御中に坐して之れを統治め給ふ、一切森羅萬象の本源にまします御方」であります。これは、世界の最古最大の聖典なる聖書に行届いて示されてゐる「天地萬物の造り主なる唯一の眞の神様」と全く同一の御方であり神道の根本なる神で在し給ふのであります。

次に高御産靈神と神御産靈神の二神は、本居宣長は「御一體ならずや」と云ひ、鈴木重胤はこの二柱の神を天御中主神の荒魂和魂に在しますものと推測して居ります。現代に至りましては、眞面目な學者達は、天御中主神、高御産靈神、神御産靈神の三柱の神を全く同一の神と見る様になりました。田中義能博士などもその一人でありまして、ライブニッツの單子説などで説明して居られます。即ち單子を極めて神靈的のもので永久に無始無終の活動してゐるものと見るのです。そして此の單子其のものを神御産靈神と見、其の單子の無始無終の活動そのものを高御産靈神と見ることが出来るといふのであります。そして萬物の生成化育を此の神の御業と認めるのであります。聖書研究者で、古事記と聖書とを比較して研究いたします者も亦以上の三柱の神を聖書の創世記の神（三位にして一體なる神）と對照して三位一體と見做すのであります。故に以上の三神は先づ天御中主神御一體と信じて宜しいと思ひます。其の次には宇麻志阿斯訶備比古遲神と天之常立神、この神々を何う見るかでありま

す。この難問題には、沖野岩三郎氏の説を取るのがよいと思はれます。同氏は言はれます。古事記には「葦牙の如、萌えあがるものに因りて成りませる神の御名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神」と記されてあるが、この古事記よりも九年を経て書かれた日本書紀には「時に天地の中に一物成れり、狀葦牙の如し、便ち神となる、國常立尊と申す」とある。之によれば、ウマシアシカビヒコヂの神と國常立とは同神で、唯後世の人が天地に配して二神にしただけであると推定しても差支はなからう。ところが、書紀では始めて天地の中に顯れ給うたのが、この國常立、ウマシアシカビヒコヂの神だとする點と古事記に「天地初發の時高天原に成りませる神の御名は天御中主の神」とある句を綜合すれば、國常立神、天常立神、宇麻志阿斯訶備比古遲の神、天御中主神は結局同一であるといふ私の考はさうこぢつけではないと思ふ。つまり、一神を四つの見方から四神の名をつけたのであらう云々。

されば結局、

五別天神は、天御中主神御一体

といふことに歸着いたします。然しこの神こそ眞の神様でありまして、日本最高の靈神我等の先祖の神であります。天祖天照神大神が此の眞の天の神即ち無量壽、無量光の御本體なる絶對の神を祭られた至と聖き所であり、禮拜所であつたのが、實に今日の伊勢大神宮のある所で御座います。佛教の眞髓から脱線した偶像禮拜が日本に侵入して來た爲に後世の人々は、伊勢大神宮と申せば、直ぐ天照皇大神の御像でも安置してあつて其れを拜むところ位に思つてゐますが、之れは大きな間違です。天照皇大神が伊勢に齋き祀られて居給ふことは事實でありますけれども、元來

日本には偶像がなかつた

ことを知るべきであります。何も知らぬ西洋人や西洋かぶれのクリスチャンなどがやゝもすれば、日本を大昔からの偶像國など云ふけれども日本には、嚴密な意味での偶像はなかつた、神社に見らるゝ、鏡、璽、劍などは、神の徳を表はす記念品に

過ぎないのであります。その神殿すらも、大昔はなく、磯城をつくり、神籬を立て、これに鏡、劍、玉の三種を懸けて神を祭つたのであります。この祭典に使用する鏡、玉、劍を平常堅く藏つて置く所を設ける必要を次第に感じだして庫を造る様になり、それをさらに後世に至つて神籬と一つにしたのが神殿の起源であります。この神籬に関する研究をすゝめて見ますと、畏れ多いこと乍ら、天孫降臨に際して天祖が皇孫瓊々杵尊に三種の神器をお授けになつたのは、天の眞の神を祀る爲の神籬としてであつたと推察されます。この

天照皇大神

は、かしこくも五別天神、實は唯一の眞の神様なる天御中主の神徳を御一身に顯現せられ給ふた御方でありまして、世界に比類なき政治的使命を帯びさせ給ふた日本國民の大祖で在し給ひます。その御徳は三種の神器に最も明らかに表徴されて居ります。古典によりますれば、天照皇大神は女神で在し給ひ、書紀には御名がオホヒルメム

チと載せ奉つてあります。伊邪那岐尊が、築紫日向の橘の小戸の楯原で禊をなされて「左の眼を洗はれた時、お生れなされたのが此の大神右の眼を洗はれた時、月讀命、鼻を洗はれた時、素盞鳴尊が生れ給ふたとあるが、此の傳説は一概には受取れません。時代に就いても學者の間に説が種々ありますが、大體漢代の始め頃と見るのがよいでせう。しかし其の時までに我が國家は、すでに幾十代過ぎたかわかりません。御事蹟も明白には致し兼ねますが、御徳と御力を太陽にさへ比較し奉つた程ですから極めて偉大な崇高な御方であらせられたに相違ありません。そして伊邪那岐尊の命により高天原の國を統御されたのでありまして、實に我が國家と神道の永遠確立の聖業をなし給ふた御方であります。

古來神道家には天照皇大神を太陽そのものとした者が多くあり、本居宣長もその一人でありましたが、之れは間違であります。皇大神の御徳が餘りにも高く、有難く、その廣大無邊なること實に天照す日の如く

である處から此の讀め稱ふる御名を以つて崇め奉つたのであります。従つて太陽は天照皇大神の御聖徳の形容また表徴でありまして、皇大神御自身ではありません。多くの人々は間違つて太陽を拜んでゐるのであります。

然し乍ら、天照皇大神は、全知全能なる神、天御中主ではありません。其の眞の神の御徳性を豊かに顯現し給ふた御方でありまして、皇大神に關して憾むらくは、古傳に史的事實として根據を置くべき點が甚だ少いのであります。唯、私共の確信して疑はず、且つ感謝することは、我等日本民族の先祖として、天より來り給へる天照皇大神があり、天日の如き御徳力を備へ給ひ、天御中主神の大御心を發揚し給ひ、私共の歩むべき隨神の道を授けて國の基を据ゑ給ふたことであります。此の道は、實に古今に通じて過らず中外に施して悖らざる眞理の大道でありまして、

三種の神器はその大眞理の大表徴

であるのであります。茲に日本精神の眞髓が燦然と輝いてゐるのであります。井澤

蟠龍軒は三種の神器は神代の經典なり。古は字もなく、書もなければ、この三種の神器を作りて教とし皇孫に示し、その三徳を守り給はゞ寶祚の隆えんこと天壤と共に極りなし」と云ひ、玉木葦齋は、「三種の寶物は固より傳國の御璽、徳の則、道の具にして、神々相承け、皇々相傳へて、心術の要、修身の方より、蒼生を養ひ、天下を馭め給ふ道を表はして示し給ふ。神國の大本、神道の秘要、凡そ天地の理、人倫の道この三種の外に出づることなく、實に日月と俱に懸り、天壤と共に朽ちざる萬代不易の道の器にて在坐す。」と藻鹽草に述べてゐます。

されば、此の神器の徳目は一體如何なるもので御座いませうか。私は古來の學者の諸説に學びつゝ、自分の信仰體驗から感得いたしましたる所を申し上げます。

鏡は、聖潔を表はします。

一、玉は、仁慈を表はします。

劍は、權力、能力を表はします。

これは天照皇大神を通して表はされたる眞の神の御徳性であつて、信仰により眞心もて神に通ずる時、人の靈に通達されることの出来る有難いものであります。眞の信仰により我らが神の御性質に與るものとなれることがわかります。

鏡は、明確なる判断力を表はします。

二、玉は、圓滿なる全徳力を表はします。

劍は、迫撃的なる断行力を表はします。

これは、我らに示し給ふた處生の三大要諦であります。複雑な社會にあつて明確な判断力は是非欲しいものです。しかし其れと同時に敢然たる断行力が伴はねばなりません。又其れには徳の力が必要であります。徳をもて行はざることは結局失敗であります。断行力があつても判断力がなければ駄目なことは勿論で、何れにしても處生にはこの三徳の充實を計らねばなりません。

然して、この一と二とを綜合して考へます時、政治を 宰り給ふ御方の品性が一

に明示されてありますし、御經倫を實施なし給ふに當つての要諦は、二に瞭らかに示されてあります。之等は實に天祖が皇祖皇宗に訓示し給ふた所の日本政治の根本精神で御座います。

鏡は、敬神的 心構へ——信仰を教へます。

三、玉は、對人的 心構へ——愛を教へます。

劍は、自己の使命に對する 心構へ——望による躍進を教へます。

眞の神を最も明らかに示す聖書には、人生に於ける三大要素として此の信仰、愛、希望の三つを高調してありますが、實に彼我相通ずる大眞理と云はねばなりません。神と人、人と人との間に信なき世界は暗の世であります。愛なき世界は、金殿玉樓も、冷たき牢獄に過ぎません。又望なき人生に何がありませう。私共は充實した信仰と、熱き愛と、輝ける希望に勇躍し、意義ある人生を送らねばなりません。かむなからの日本の大精神に生きねばなりません。

次に、此の

三種の神器の中、鏡が最も大切

とされ、「此の鏡を見ること我を見るが如くせよ」と天祖が預言せられし理由は、「推察し奉るに、鏡は聖潔——敬神的態度、即ち、信仰を表はすもので、政治も生活も神信仰第一に、つまり「かむながら」にせよとの大御心で御座います。

人の心が眞の神に統一した時程、澄み渡ることはありません。澄むも、統ぶも、同じ語根から出た言葉でありまして、心澄めば生活も統べられます。皇國とは「澄める御國」でありまして、天皇即ち「統べる命」の治め給ふ、神の聖潔と神の平和に恵まれたる御國の意であります。此の神によつて、清く、澄み、安らかであると云ふことが、日本の國體の特長であり、日本人の生活でなければなりません。我が國に於て、清淨、潔きことを第一とし、禊、祓の儀式を行ふた理由が茲に御座います。之れ亦、聖書に於て、眞の神が「我聖なれば汝等も亦聖なるべし」と宣ひ、又、人若し潔

からずば主を見ること能はず」とあるのと同じの思想で、眞の神信仰の根本となるものであります。

扱て、私共は此處まで、日本人の大先祖は眞なる、唯一の天地萬物の造り主なる神を信仰してゐたこと、日本精神の眞髓は此の神信仰を中心とした、隨神の道なること、眞の神様の御徳を具備して遣はされ給ふた我等の天祖、天照皇大神は、其の神徳を三種の神器に表徴し給ふたこと、この三種の神器の眞精神が「神ながらの道」であり、日本精神の眞髓なることを學びました。されば我らは、日本人として、意義ある人生を送る爲に此の眞の神信仰、隨神の道の眞髓を體得せねばなりません。

皆さんの中には、既に、何年か前から幾分づゝでも此の點に目覺め、求道の歩みを續けて來られた御方も御座いませう。しかし、貴方の學問上の理解が貴方を救ひましたか。貴方の熱心な祈禱禮拜や修養が磐石の救の喜を與へましたか。祝詞が、儀式が、ゆるがぬ平安を齎らしましたか。如何なる深い研究も、朝夕の禮拜も、立派な

祭壇も、儀式も、貴方を救はなかつたではないでせうか。貴方の御信仰は佛教ですか。神道ですか。キリスト教ですか。私は、名稱や、外部の形や、理窟を問題にせずにお聞きいたしたい。貴方はその信仰によつて過去、現在、未來に關して、完き靈魂の平安を得て居られますか、一切の罪、穢の重荷は解決済みで、消滅して居られますか。死の恐怖はありませんか。何時死んでも神の御國に行ける確信がありますか。何んな事情境遇にあつても常に喜び、感謝して暮せる、搖がぬ平安かありますか。自分の生きて居ることが確かに世の爲、國の爲に役立つて居るといふ信念がありますか。眞の神の救に與つたものには之等が悉く成就されて居るのであります。

ひとつ、本式に眞の神に近づき救の恵に與りませう。「汝ら神に近づけ、さらば神汝らに近づき給はん」と聖書にあります。然し乍ら眞の神は至と聖き御方でありませう。儀式でなく、理窟でない、眞の禊祓ひ、罪の贖が先づ第一に必要であります。「われ聖なれば汝らも亦聖なるべし」これが神ながらの道であります。清められては

じめて、聖き神との交りに入れられるのであります。しかも神は無限の愛をもつて全き罪の贖の道を備へて我らを招き、靈魂を生れ更らしめ、凡ゆる祝福と、恩恵と、徳の源である御自身の御靈を私共の衷に注ぎ、満たし、如何なる事情にも境遇にも消え失せぬ聖き喜、愛、平和、能力を與へ給ふのであります。此れは心の中に信仰によつて建設される神の國、天國であります。死後も永遠に續く絶對の幸福であります。斯の様な人々の集ふ群は地上の天國であります。私共は貴方が此の救の聖い喜を一日もはやく得られ、神と祖國と隣人の爲に眞に喜ばれる生涯に入られんことを祈ります。詳しくは茲に盡しかねますが私共は、眞面目な求道者を歓迎し、此の眞の神様信仰による救の喜への御手引をする勞を決して厭はぬものであります。(梅田香村氏講述)

(附記) 眞の神様の救の道筋に就いて最も詳しい書物は聖書であります。是れをお讀みになることをお勧め致します。(一部十錢以上各種)

國民聖化同盟機關雜誌(七月創刊)

月刊

みくに

毎月一日發行
一部 十錢
六ヶ月 六十錢
一ケ年 四十二錢
(郵税不要)

敬神、修養、愛國の國民雜誌です。
誰にもわかる日本精神鼓吹の雜誌です。
知らぬ間に知識と信仰に向上して行く健全な
雜誌です。(見本一部十錢 郵税共)

東京市淀橋區〇木一ノ一四四番地

發行所 國民聖化同盟中央部

振替東京 番

▲國民思想聖化向上の爲に續々小冊子を
刊行します。御購讀下さい。

昭和十一年六月二十日印刷
昭和十一年六月廿五日發行

【定價拾錢】

不許複製

著者 國民聖化同盟編輯部

東京市淀橋區柏木一丁目一四四番地

發行兼印刷人 利根川 郁

東京市淀橋區柏木一丁目一四四番地

發行所 國民聖化同盟中央部

振替東京 番

◆國民聖化同盟の主旨◆

- 一、私共は日本精神の眞隨なる惟神の道に則り、同胞の聖化、向上、團結の爲に、敬神、修養、愛國の運動をいたします。
 - 一、目的達成の爲めに、各地に講演會、修養會等を開催し、又機關紙、及び圖書の出版を致します。
 - 一、志を同じうする日本人は、老若男女誰でも會員となることが出来ます。
 - 一、會費は一ヶ月十錢、入會申込書に六ヶ月分(六十錢)以上を添えて御申込み下さる。
 - 一、會員には機關紙「みくに」を毎月無料送附し親密な連絡を計り、思想、信仰上の指導、また一般人事の相談に與ります。
 - 一、本同盟の會計は一般會員の會費及び臨時の自由献金によります。寄附金の募集は致しません。
 - 一、本同盟は政治的運動には絶對關係いたしません。
 - 一、本同盟中央部は當分、東京市淀橋區柏木一丁目一四四番地に置きます。
- ◎義は國を高くし罪は民を辱しむ (聖書)

終

